



LIBRARIES

UNIVERSITY OF WISCONSIN-MADISON

唐太日記 = Karafuto nikki. [vol. 1] 1860

Suzuki Shigehisa

Edo: Harimaya Katsugorō zōhan, 1860

<https://digital.library.wisc.edu/>

<http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/>

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

未共三
處

唐太日記

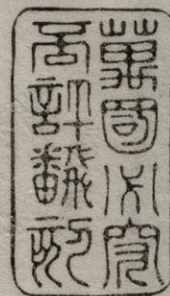
上

茶溪鈴木先生著
多氣志樓主人註

唐太日記

全二冊

橋本玉蘭翁畫文苑閣藏板



唐方日記例言

此日記は人の見方と物もあつた唯余の五百里外は
孤島を經歷し辛苦厭棄する情状を有するは志す
思孫の志あるものなりや吟詠一首能くするも生得難
し能くして珠璣もあつた貴く思孫の志す能く書
漢て自戒し免え又る能く思孫の志あり家識とあり
何は余の志あり

夷地文字のし生地も能くありしなり此日記もあつた
付佛教の言の同もあつた笑ふも同もあつた
程好の考拠をよむのし

唐方日記 例言 〇一

甲の程のあまも又定てり書記するし書入の記程と程歴の
 二進進してたの程のこまゆ故に程進悔情の時よよと
 遠也と申ひ遠入るふよめまのり他行ひと申

たあ甲寅のな唐島七の島にの西宮下と申て

程よと申るもの及

はまの茶後を甲寅の文書長のものりよと申て
 連島の子役せらまクニユニタシとのる運上屋えよと
 シユヤ越と云ふは山程開瀾と申和人のあつて通ひき
 りのちの山申踏破して東満るのナイブツとのる

出来より奥トツリ、の候を擇り、マーヌイと云ふれども、西浦へ
越来よるとシラヌと云ふソウヤ、乃後海城へ歸らば、後海
の風を待たせらるる十余日の筆記中より、生要致、採集して
置れと、彼地へ此方の海所置り、舟より舟に乗り、舟
は、舟より舟に乗り、舟より舟に乗り、舟より舟に乗り、舟
余は、舟より舟に乗り、舟より舟に乗り、舟より舟に乗り、舟
舟伸と、魁女と、國画と、入道と、持と、舟と、舟と、舟と、舟
伊勢の國と、舟と、舟と、舟と、舟と、舟と、舟と、舟と、舟と、舟

松浦竹四郎源弘

あ政四丁この彌内中は、此の御殿の橋舎と云ふこと

此乃... 〇二... 〇三... 〇四... 〇五... 〇六... 〇七... 〇八... 〇九... 〇十... 〇十一... 〇十二... 〇十三... 〇十四... 〇十五... 〇十六... 〇十七... 〇十八... 〇十九... 〇二十... 〇二十一... 〇二十二... 〇二十三... 〇二十四... 〇二十五... 〇二十六... 〇二十七... 〇二十八... 〇二十九... 〇三十... 〇三十一... 〇三十二... 〇三十三... 〇三十四... 〇三十五... 〇三十六... 〇三十七... 〇三十八... 〇三十九... 〇四十... 〇四十一... 〇四十二... 〇四十三... 〇四十四... 〇四十五... 〇四十六... 〇四十七... 〇四十八... 〇四十九... 〇五十... 〇五十一... 〇五十二... 〇五十三... 〇五十四... 〇五十五... 〇五十六... 〇五十七... 〇五十八... 〇五十九... 〇六十... 〇六十一... 〇六十二... 〇六十三... 〇六十四... 〇六十五... 〇六十六... 〇六十七... 〇六十八... 〇六十九... 〇七十... 〇七十一... 〇七十二... 〇七十三... 〇七十四... 〇七十五... 〇七十六... 〇七十七... 〇七十八... 〇七十九... 〇八十... 〇八十一... 〇八十二... 〇八十三... 〇八十四... 〇八十五... 〇八十六... 〇八十七... 〇八十八... 〇八十九... 〇九十... 〇九十一... 〇九十二... 〇九十三... 〇九十四... 〇九十五... 〇九十六... 〇九十七... 〇九十八... 〇九十九... 〇一百...

甲寅 唐太日記卷の上

多氣志郎 松浦弘 評注

嘉永甲寅六月余堀使君ヨホリシクンより從ひ蝦夷地の西浦を巡視してソウ

ヤ蝦夷地西海岸ありてカラノトへの渡海場所あり 小風待也

同十二日順風にて同所を出帆一唐太島カラフトシマある志良努之シラヌシに向て

颿シマ

注志良努之ハ唐太島の南第一岬西りてノト口の崎の少シ西
岬あり後ろより山有是より靠て一小湾を覗くとウソウヤと云る
と十八里との少極高凡四十六度余也シラヌシと云シラウシの

誤言也シラ、々岩のト云、ウミ、々、ト云、此地前、一ツ
の礁ある、の故、は、辨る、會所、一棟、其外、蔵、夷家、七軒、甲寅
の頃迄、ハ山、靺人、等、爰、来りて、交易、を、なせり、也、利

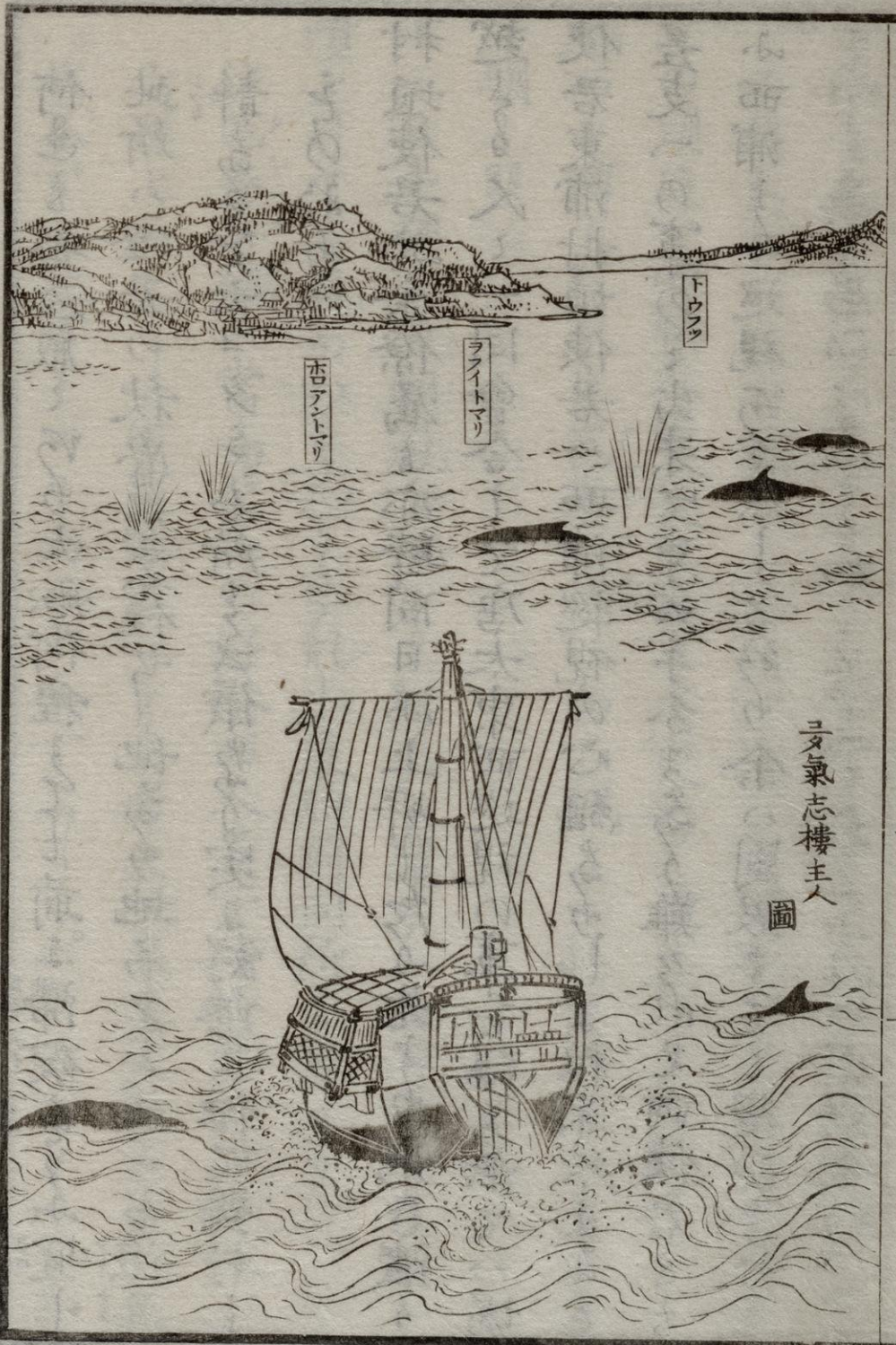
風、西、は、轉、たれ、區、春、許、潭、へ、向て、颯、々、此夜、ハ、洋中、にて、夜
を、明、し、翌

十三日、未明、より、朝嵐、ハ、帆、を、お、遣、り、遣、る、其、湾中、鯨魚、潮、を
噴、上、けて、其、眺、め、い、こ、ん、く、れ、辰時、前、同所、に、着、り、

注、區、春、許、潭、ハ、當島、第一、の、好港、西人、爰、を、指、して、ア、ニ、ワ、港、と
云、運上、屋、元、より、建、物、蔵、々、々、弁、天、社、等、美、敷、立、り、其
北、八、丁、ハ、バ、ッ、コ、ド、マ、リ、南、三、十、余、丁、ハ、ホ、ロ、ア、ン、ド、マ、リ、等

何處も番屋蔵こりり大船何程うても前タイに滯タイ碇タイはるふ小宜コロし
此所ハ癸丑の秋魯夷來住せし地あり地名クニユンと浪無ナミナク
静シヅカあると云コタンと所と云儀あり實は好港に依て歸けし
とのなり

村垣使君其餘僚属も亦皆同日ふ上岨シたり是より先き渡り
越クる人同一會合して唐太東西巡視の事を謀る兼てハ堀
使君東浦村垣使君ハ西浦巡視の心組ありしは糧米人夫あつ
差支への事のと出来て東西手分もあり難々れを西使君とも
小西浦より巡視ありしとあり余ハ國界までと從ひしつ
とと兼而思ひを述ともかく差支もある所水野氏正太也



牙氣志樓主人

圖

トウツ

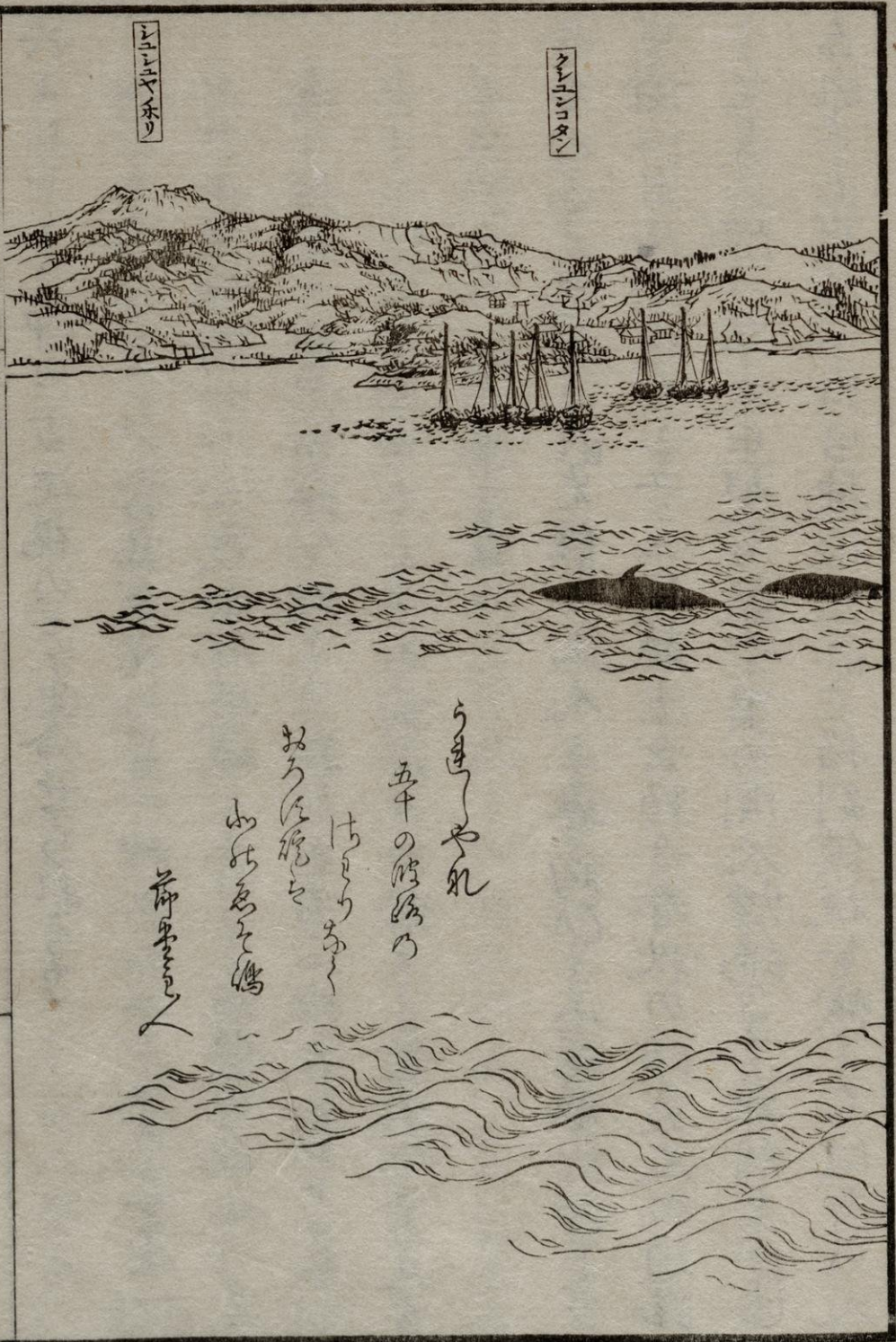
ラフトマリ

ホアトマリ

心西取し
 支那の
 外東前
 海も入
 林外
 精
 此
 海

シニヤホリ

シニヤホリ



らまやれ

五年の船路の

はまやれ

おろはれ

おろはれ

前

共よシレトコ岬の方巡視の^とを命せられし

注シレトコサキ々當島東南の第一岬クシユンコタンを去て
三十余里極高四十六度余峻巖峨々として絶壁の地あり
是は激せる潮勢白浪を溯ゆき難所と唱ふ地名シレトコをシ
ラ、イトコの結語ありシラ々前も云岩よりしてイトコを尽る
と云儀あり岩の果と云り

余るるあく思ひしれ先能く土人よ尋詢ひし區春許潭より
東浦へ出留間道よシユンユヤ越と云あり春秋の頃夷人の通路
して夏の際ハ草木生繁り数十里の間人煙絶々難所ありは
あれとも東浦へ出留捷徑あり格別僕從を喊しあは聊の人

夫よりて通路あるべきよしあり

注クシユンコタンより以北五里計りてシユシユヤと云る所有

其川とちよ入る少しの陸を越日程六日ありて東海岬ナイ

ブツよ出る是をシユシユヤ越と云る然るふクシユンコタンと

出て東奥に到る也當時本道と称る南の方叶ふシヤニと

云るに到る是より上ある沼に越此沼五より陸路ニ少しを

過て又沼あり五東浦トシナイチヤへ出夫よりニヲチヨボカリ三

ウエンコタンリコヌシヘツリヲブツサキ一シユマヲコタン五イヌ、

シナイ余ヲワエ六コ六ロレイニシユシユウシナイ六シユマ一

ナエブツと廻るあり其里程一倍に及ぶよりて夷人等步行

の時へ此レユシユヤ越の方と通るあり

余ヒシカ竊ヒシカは喜ひ此道を踰ユて国界は至んことを堀使君は請ひ申せし

は使君その意をよみて人吏の煩ワラヒはあらずさふ慶置もあらずは

ゆ何ふりて吾山越はくし命せられし然る此日矢口清三郎

直養も余もゆく此間道を踰て国界は到らんことを村垣使君へ

建白したり其志暗合しつとも亦奇と云へしは是は兩人同行

して山越あはれしものよきを松前の家来は談し支配人清水平

三郎へも談し兎角して人吏糧食の手當も出来されは此行の

志へ遂は決しぬ

十九日今朝へ朝陰クモり昼の頃より空晴風吹出せり朝四々時過

多頃^クは區^ク春許潭^{コタン}と發せり

余從一^{名ハ}又

^{壯助}

直養も同一^{名ハ}又

^{佐吉}

熊打足輕水牧惣太

<sup>松前家
家来</sup>

番人富

松豊吉嚮道者區春許潭の乙名イツホンダタゴエの小使サーブニ
アイノ等あり人足よハエ子アンベツ、エシマワセタボ、シラボク、ヨヲケ
ン、モンキワムツナ、ケトチン、エルシユトイ、カンコ、女夷よらエ
ケラサケンピリケス、ケタフヤ、ヤエランマ、シラエト、ヲコランヌ、シユ
コシユイケ、上下貳十四人あり此内糧米の減じらふ随中よら
追々歸きり

三拾余町よりて雲羅^{ウンラ}此所より送りの人こと袂を分てり此よ

ハ番屋あり又去年より在留の魯西亞人の畑の試作りせり所

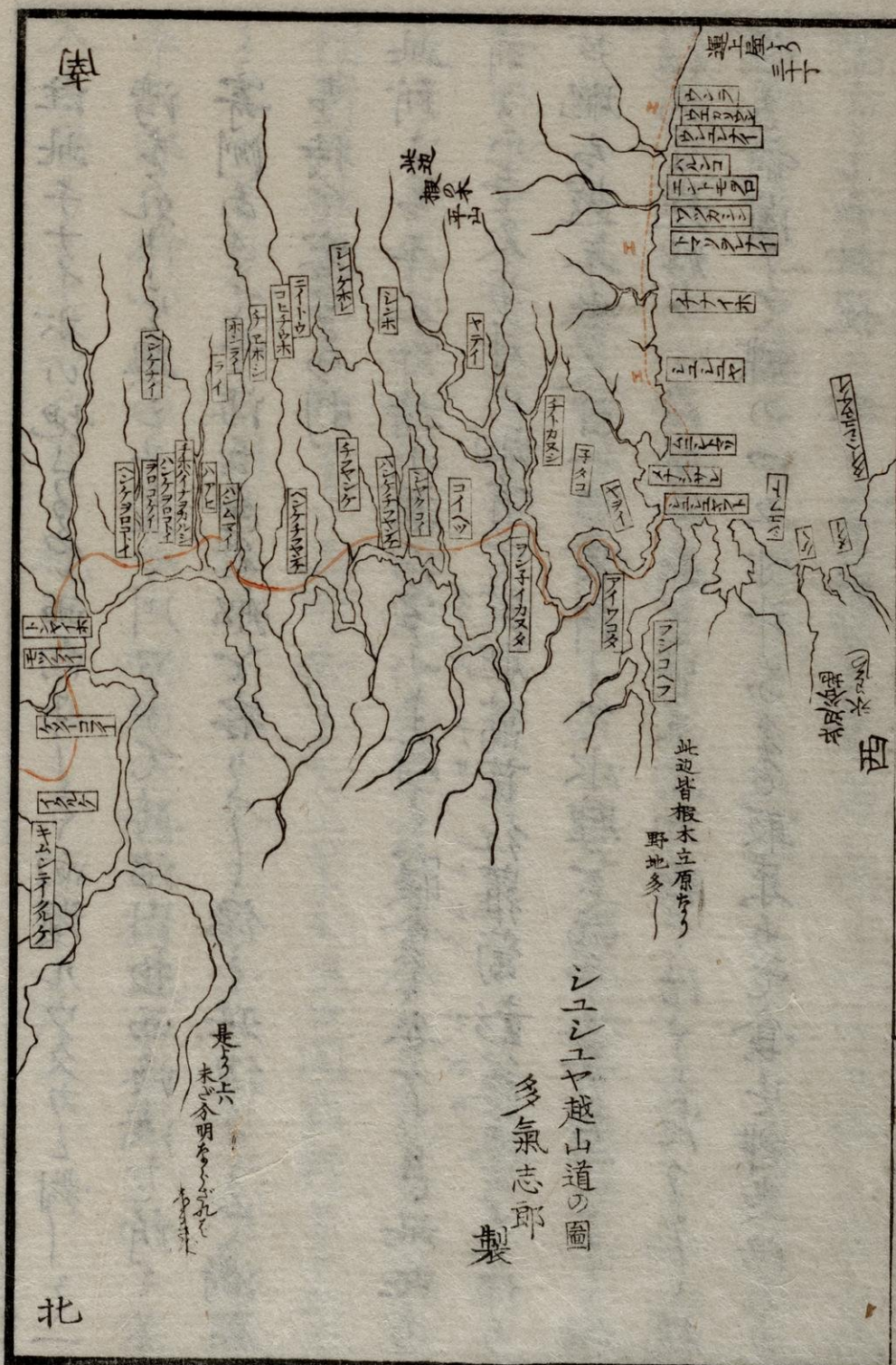
あり三畝歩程も有之蘿蔔ダイコン吼ゴシヨイモ芋イモあると作りてあり傍に番小屋の跡あり瓦を製したる跡カクダ模型写取散りあり

注ウラとくろく地形後ろの方トッ槃立山とく其下に番屋一棟あり其邊り地味肥沃ある故に魯人も畑地を墾し又其地の土をりて瓦等を焼く跡有なり

夫よりウコカリウシ此所以前ハ夷家有り今ハなしウシエンナイ稻荷の社夷家三軒とく五町余りてエントモヲ口同式軒とく五丁よりトマリランナイ同四軒とく八丁余りてチナイボ此所は清水平三郎の持小屋あり是より明朝の潮を待てシユシユヤ川へ乗入る船として来く日も晩きされとも一泊りたり

注此千ナイボの地より西向より向濱ルウタカと對し一
灣を丸く其奥シユシユマ川口より其内熱而海淺し所より
寄洲ありて干潟を造り船を容るる一依り此辺りより満潮
を待つ容多あり

此所より平三郎持小瓶阿多ふよの寝食も安かりき此処の
前より六斗及半斗の畑有て芋ダイコン肥チサ萵苣ニンジン彭翁菜ゴボウ字を伴ふ
芋肥を越年番又才一の食料として水腫を病むる奇薬のよし此
後乃よ炭焼の小瓶あり是等皆平三郎始て伴ふたるよし後
僕等前濱より鯉の四五寸斗あるを取来りて食は鯉夷語をカ
バレイと云此夜ハ心よくお臥せり



此辺皆根木立原なり
野地多し

シユシユヤ越山道の圖
多氣志郎
製

是より上
未だ不明なり
今記す

北



此辺
シユシユヤ
高山あり

此辺
シユシユヤ
山あり

此辺
シユシユヤ
山あり

北平山
根木立
原あり

此辺根木立
原あり

注當所より奥シユシユヤ辺は産する鯨の味美なること又其多く
産する他は穀をし冬日より此湾中一面は氷結り也出の
辺りの土又其氷上は火筒火と燃し穴を穿其火温の氣を集
り集る魚を括捨るとて突取る羽の八龍湖より氷を割て網を
扱し渙するより其魚一倍せりそのや又其肉味も龍湖より比
より多しを美るなりといふ

廿日朝曇りたきとも雨の氣色とも見え候今朝潮の満より
より昨夜より夷船と前浪より通りたきは未明より支度して乗
船せり然るに此行ハ嶮惡の山路を越るとされを尋常の服装
よりて入邊と通行成難きよりあるは夷人の衣服アツシと云物を

著一尾花帽子と云ものをお被りキナホスとのる脚半を附くや
因て一絶を得くや

欲執孤筇窮峻奇風餐雨卧亦何辭樹皮短褐芭花帽也好

人呼爲島夷

注此間道ハ道形と云き越を凡の目的と山沝水賦等と取て
丈より高き草の中と云ふこと谷地中あると行とあること故
は終日下柙のハ露深きれを此装て行とあり其アツと
つら木皮ラヒヤウのノ木とて織たものよりて是よりあくの雷紋
扱のものを木綿りて縫綴と土人の常服尾花帽子ヲナホウシとのら
芭花の穂とて作りしりのある多く六羽の最上翅より出又

キナホスとのく奥羽にて蒲脚半カマバキとて寒地ハ本綿にてハ
 雪の中凍合してあゆむを急ぐ又草深き所を越るよハ一日も不
 保々故よ多く此蒲にて作りしを因り是ハ南部領の沼宮内
 辺より出其上品なるハ馬の尾と以て作り雪の中越る山中ハ
 ハ甚よ冷しきものなり

凡半里程乗出たる頃より空の氣色俄よかわり雨降り出たり
 ツナイホ地名地よりハ三丁余にてエエエヤ地名地夷家八軒あり三拾丁
 余よりエエエエヤ川口あり入口水深甚丈五六尺余川口午の正
 中よありなり

注シエエエエヤ其地形後ろの方ハ鳳尾松トビの黒く繁茂せり

山續きニユシユヤノホリとのろろく靠て前ハ少一の岬をり其
辺り蒲柳原ヤナキよりく水際より蘆荻をり其内は家居を安所と
此湾の第一奥の東岬よりて波浪少くも邪くニユシユと柳の
夷言その多きによめり号せり也是より土人等歩行の節
ハ川口の手前字メナシサとのろろく海を歩行しり
夫より山よ入て字チタエりあるよりおの船より行ふ一里も
沖を乗りて此川をちく棹より入る此川は湾中第一の奥の
方より洪水の節押出せり土砂多く処々は附洲となりて船
動を乗りよとて難航する所あり

川は流りて四五丁程の左の方椴林の内は鷺の雛の梢より落

たゞこの驚て飛廻るを見附くや番人豊吉船より飛下り續いて
 夷人共走り廻り終り捕りたり是を西使君へ献じしとて
 水野氏へ書を添て歸り船の便なきたり此辺鴨の子雀の如
 くあまの赤群く水上を行き渡りて路より川口より半道河
 口にて枝川へ入爰より船を棄て上陸せり此所字子々地名と云由
 木挽小屋あり雨は強く強く降出りこれ此處の小屋は一泊せ
 と織と去りしとも無て山越の道を積りて食糧を携へこれハ
 何程の峻急なりとも雨は障へらまじく滞留ありしとて志を
 遂ぐるもあまの鬼を角もして前路をすまんと決定し
 歩を進めぬ

和人と白米夷人と玄米とて九十日程の食糧を負載しての
余の船とてトンナイチヤトウナエブツの方へ回して積りて船
一の分も引續いて出たものなるれども風潮は障へられ
ぬや東浦を回る内終り此船来りてさうし

注此船廻りの事ハ前よひひるるぬく千ベシヤニより沼越トン
ナイチヤへ引出し東海岬をナエフツの搔送り行事あり

此辺り両岬とも檜檜夷松のその林より女羅數丈の長さとの
廻りて地は垂るる内地は絶て見えて唐画の山水の如く
やと一絶を賦して其木の皮を削りて置

松掛女羅千尺長素絲翠蓋滿山香平生愛翫唯圖畫始識

人間有此疆

此道樹枝交加して眼を遮り頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を
 着せ交々雨は降くと降り困苦のふをかめり幸うして二里
 ほどすすみ少く小高き所より弁崗をきしひり爰をメ、
 地と云小流ありて水清冷蚊の多きと云言語は絶たり火を焚
 少く六跡あるあり夫より壺里半程して字アライ地名と云
 此所少く小高深林の中へ小屋掛したり小屋掛と云る六水の
 宜しき所を撰て又小高き湿地ありと云と見えあるあり名忌
 あり八腹痛の患あり湿地に臥ると時八瘴氣を打きて病を得且
 虫の類多して難養するあり扱小屋掛と云る六より立

本へ枯木の丸をわきし是より屋根紐とて其上を樞の木
の皮より葺あり夷人とも車馴たは携へて其の皮を
剥きよて手早とてそのわき

注此山道中誰にても通行の時小屋を架さるや必ず樞の立
木の皮を上下長四尺斗に鉞目を入置て剥き是より葺く縁
三四人の宿とて其小屋家根とて其皮凡或十枚三十枚
を用也其皮を葺くの本より必ず一枚ありて剥きよてその剥
取し本へ枯朽るものちや傷て其時より小屋掛したるに云所の
跡を余通行の時節見よ凡一ヶ所毎より百本余のち三帖
たり是等のよりても此地樹木の多きことを知るべし

小屋の前より枯木を集めて終夜火を焚き急率に掛る小屋
たれを雨降あしうふ漏りて堪極くも何とて夜上る油紙と
引掛て兎角して夜をぬぬ

廿一日昨夜より雨降り續きたり申す時以てアライ地名と出て半

丁程にてアライ川より此川水清冷なりと爰にて嗽をぬ夫より

山道前日の如き搬地夷松の中と九十里程にてコイ地名と云地

より深草の中より小屋掛あり是より入て朝飯の極り飯を食と

注此地一つの沼あり其沼周り九十里半是より落るをコイへッ

と云水清冷なりよりの出入多通行の節多し此所にて宿

をとり余り通行の時も此處より小屋ありとあれとも爰にて

来るをを得たりとサツコイと云るにて露宿しぬ之ユ之ユヤ
と云く是よりて雪路ありは早著と云れども夏道ハ中々
著し難し

番又富松樹皮を剥て此所を始と通初せし事を記し其の病
みより余乃其本に漫書したり

草露鞭來山露新手排茅塞分荆榛風流宦吏過斯地開闢

以來唯二人

此辺より左右草生茂り虎杖イヌナリに似て夷言ハツハシと云まの款冬ツキ
夷言をコロクニと云ふ一圍余あるの路を塞と先イナを走入ハ見ると
能く其の上泥濘して深き所ハ膝を没を去里河と云て小川也

渡り深林を分行くは向より来るものあり東浦ヲタサンといふ
所よりウクニユンコタン勤番の松前家士一同僚より書を書状の
飛脚あり此夷人の話より先立の間宮等へ積贈る朱船をヲタサン
洋して傾覆し其朱を失ひし故より来る飛脚ありと此朱も
我の糧に關係するあれハ各是よりして心を傷めしう爰して
飛脚は別道晝食して歩を前あたると路に猶くベユシタ忌くといふの
草蓍クサシ成り水葵の如くして葉の大ききあるをベユシタ擯舌と云
款冬クワントウの多くして以て大なる

款冬如竹鬱叢生葉々相重翠影清山路不妨多雨露一莖

代傘蔽頭行



注世間歎冬の大ありとのと秋回歎冬と号て好事の人其業を
 摺よ大き藤紙よ半一又風強家多是と筆よ此よ此地の物
 ハ是よ倍して若藤紙よ摺よ対ハ全紙よ滿へく是よとのよ
 比せえ馬乗合羽よ云屬よこ

晝休せし所より武里余よてライ地名と云る茂林よ小懸よ此辺立

木の中程を凡よて扱きたるやうなる跡あり倍て是よ土人よ

向うよ懸熊の雪中途よ迷るるをりありと又是より武里余

行てハ一セ地名と云所よ夷人ともり通初の爲よ掛置るる小屋

止宿と

注此所とハ一セと誌をされり實ハ此処ハアセクシとのり地

ありハセる此所より行て先生嗽ききし川をハンケナイと
いふ其川の向あえし越而此辺の土人往來とも此所の
川の此方より彼方より北宿より南よりあつて余も此川の
向より宿へを記

此小屋ハ左右より雨覆あつ中より火を焚あり今宵直養余も
云糧食給せ及ハ志を遂ぐる次日を併せて進んたとすれども
女子メコの人妻も接りたまは意を任せて依り某處へ進んで糧
食の手當をさへし行李ハ跡より搬運せんを余も托と
とわり乃其意を任せて余ハ一日路も後進してはるよんと穢れり
評余未だ直養を邂逅せし歟と此所より讀りて其意氣を

感し拍手して一笑と此深取中数日の難程猛獣の凶虐と
志く惚へき地あり小直養強て前とをく其意敢て糧食
の爲のこゝろあゝとあし此辺り足は泥濘に没し面部は何
やうな装とも忙懐の爲は責くくると同行の爲は却ち取
て路をとり取ると分時ハ何とも難し余もクシユンコ
武人と同行のよう隊長より言聞されしを爲人の遅足と察し
前所を於一日あは只土人のこゝを百運て出立したるに按よ遠
くを其支土の遅足とて種々の奇話もありし他他日土人
共より聞ゆうしもおの

此夜ハ夷人共の掛る小屋をれハ床とさとのもちく坂殊り

多くして紙帳の破きより入瘴氣肌を侵して眠るにきき無きや
き

廿二日朝の雨ハ曇り昼迄より晴となり直養ハ朝疾く起き從僕
走又番人富松等ハ嚮道者イツホンク其外人夫五人を引連糧
米其外必用のものゝ持せて余より先ハ敷せり余ハ少く後進
て出たり山途廿町余も過てハ一セハツ水清く浅く傍々此
川より嗽たり

注先生此川ハ一セハ有よふりてハ一セハツと志すされり
此山中ハ一セハツと云ふものなり出入此川を指しと云ふべし
ケナイと云ふありベンケラ上と云ふことナイと云ふ別流也

此所ハ上の沢と云儀々余ハ此川の上にて宿しぬ

又拾四五丁とて同一川の上もあるサアブニアイノ余を脊負
て渡せり夫より一里斗りよと字イナヲカル之と云る処より
出る此所木幣多く立て山霊をあらう

注此所本名チハホイナヲカルウシと云ある一柳の古木有

其傍に往來の土人削花エナヲを建て拜をり行とあり其謂ハ

昔此島に鍋の蓋を以てタコイに住る姥より土を以て始て

鍋を作り東浦の土人へ此製を教へ夫よりして南濱より西

浦の土人にも教へんと鍋を脊負此所より越えりて風を過

て破りたりと夫より意の違せざるを患ひて此処より病し

偏り終り死せしと云り其跡を今神より置き此辺りの出
人往來の時として刺花^{エナラ}をまわして數日の途中の食糧を獲さ
し越さんとを祈り誓ふとのや也此其土端を此島にて因ひ
しよと昔々の赤坂話一の指し思ひ居し今度^{丁未}
産堀君は西浦の初よりユンナイにて右の圖せしめさ端
をき校出中より活め出せしとして同所の土人獻きし中にて
持歸りありしとを待り余も始て出端を因ひし昔傳り
を信しぬ

又幸運余よりユニユヤの川出より出る此処をヲロコトイと云
此辺りぬり道六みあなれとも草生を因り深く歎きのゆく

吾々己
夫々己
の己

徑リ七寸余

深サ三寸五六分

手作リ厚サ

九三四分ヨリ

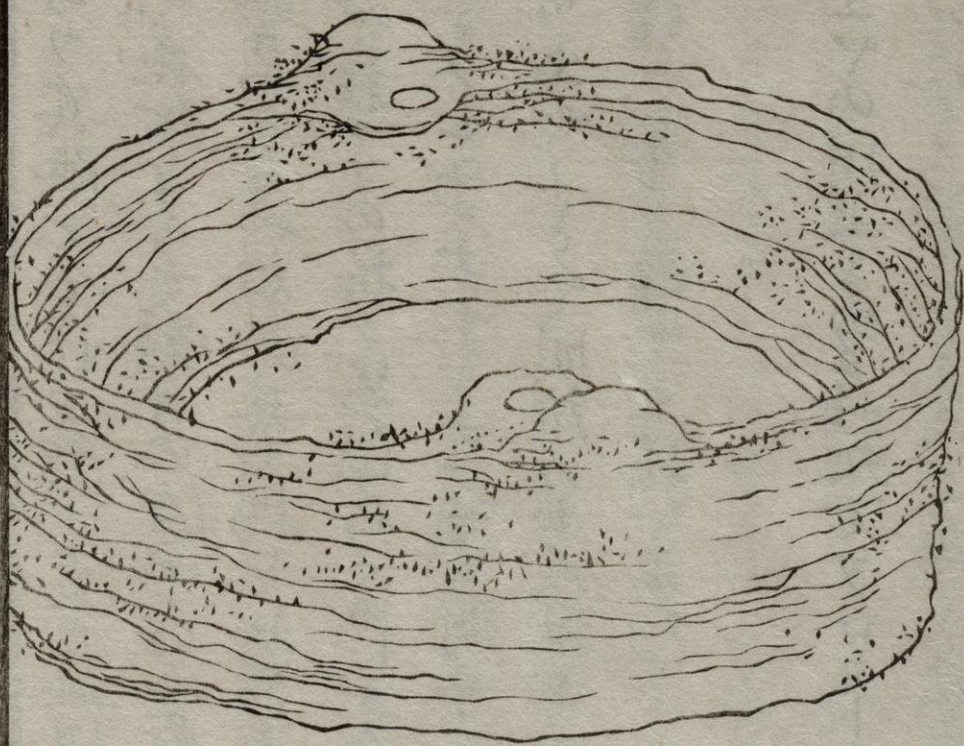
五分ニ有軟ナリ

土至テアラタ

砂マヤリナリ

牙氣志郎

縮写



太くまゝの故の多きもの言程は縁よりまより同一に拓ちる深藪
中を分て去る半程行てまゝにユエユヤ川の端は出る

注此地ハ字ベンケヲロコトイと云ふ又し始めはわし川端に
ハンケヲロコトイと云下のヲロコトイと云儀あり此辺り歟
冬原あり余爰は肉徒容と數十莖均くウクニユンコタン
の小使ツクニウと云ふ頗物を毎へ居る者ありの故は是を
とふは何なるものぞと云ふ次敷く石連するロレイの土人ア
カラカイ人^名ウツるは是ハ夷言エバーと云て東海岸の土人ハ
撲傷^{ウチミ}折傷^{クシキ}金創^{キリキス}等よ是を搗碎きて附るは其切驗著と
依て考ふるは是ハ南嶺より西よまゝく東海所よ多きこと也

その形像日光山誌まゝ本村圖譜等より出され畧す

土人等夫婦此所は小屋を作り居る名をスグロクと云女子を

をトヒンと云其傍は小川あり字モツケイと云より其出入等ハ

何の爲に來り住むる也聞は轉の漢と云一又食料は用ひらアンラ

コロと云る竹の根をほり來り居るあり依て石連るる出

入等は直に煮て振舞ふ

注アンランコロは東西蝦夷地にての名にて此地をハ一と

云別黒卷丹クロユリの玉タマなりは餘ニヨカイと云るのあり是車卷丹クルマユリ

のとりありトマと云て延胡索エンゴサクの根とも食用と云延胡索

ハ藥名として通名とヒツチリと云漢名を滴金卵と云生圖

本林園譜より出づる水ハ畧一次ハハ一ニヨカイの二種と出づ
この水

夫より小流と踰り何處も獨木橋あり半里程してゆく深林
の中は夷人の掛る小屋あり此所をエクル地名と云此林と出て
廣き所より出づり檜夷松の緑深くして草の丈々高々す白き
總揚枝振の如き草多々く景を宜き地あり

注按るは是草にあり及菌草キノコの一種あり雜木盤石枝
葉落てる腐草クサ喬木ツキ倒きて朽クサきるの地如く梅雨の次
ゆ此ものを生じて余も此地よりして數十種のものを見ぬ
イナウシ地名と云此原野を暫く過て又山道に入り武里余はて



花の色
萱艸
如シ

花の色
紫黒ナリ

ハ
黒卷丹
圖

ニヨカイ
車卷丹
圖

多氣志郎
寫真

深林の中小高き所より小窓掛して夜半の多し今宵は直養も右
ら及いとわひいりたれと

辛苦嘗來雨又風寧堪獨臥亂山中別君最是傷心處今夜

同林唯草蟲

又

斜架危檐了木支潺湲先辨與茶宜泥鞋探嶮穿山骨秃筆
題詩白樹皮雲濕半牀無客伴草埋荒徑有熊窺怪禽夜叫
長松上獨寢幽奇就睡遲

注テウシエナヲウシの結構あり此地東西の境目よりて分
水の地あり依て往來の出人東より味谷とのハ割エナヲ花を伴ふ

東の方の山靈は嘔乞し西よりなる者ハ西の神は嘔乞しと述
中の安と祈るあり依て多く此所より立ち去り故に號る
多しといふ儀ありと

廿三日朝曇り其時小屋を出て山林を暫く行ニヨロマトウ地各と

方沼の端より出て夫より廣き野地より此地萱草カンソウ咲乱色に空閑

は藻蔭アヤメ多く咲交りせり地より四方お開けさしハ舞氣を散り

たり比喩も坂の多きころ糠を振蒔くの如し一うりさるるを浪う

那ー夫より又落虎杖多く生熟ありた中を分け行より前行の

人ハ少しとも見えてぬちり其蔭の大き根の所よりハ生る尺七八寸も

廻多し一を里余りして子モ一地各と云ふ処へ出る此所川あり中流

間斗夫より山道又野地を過てタコエ地の川上カモイチウといふ所
 して登飯とまじく深藪の中はクマサ若吏りあるを分てケナシ地
 到る又此所より小川あり其傍は夷小屋を軒あれとも入あり又
 同し処四五丁よりく中四五間の川は大きな柳の樹の傍にさるる
 橋とるは処あり枝ハ半天のぬきも出て深翠叢とて心身を
 是を越て野地山林を過てホクイチヤン地といふ所にて休む
 禅頼光峯入の畫巻物にて彼大江山より童子の岩屋の
 まり、大なる溪濱河を枯木を倒して越るはあり生
 物さるるを其心拍して城のあひらんとて爰より
 て竊笑しぬ



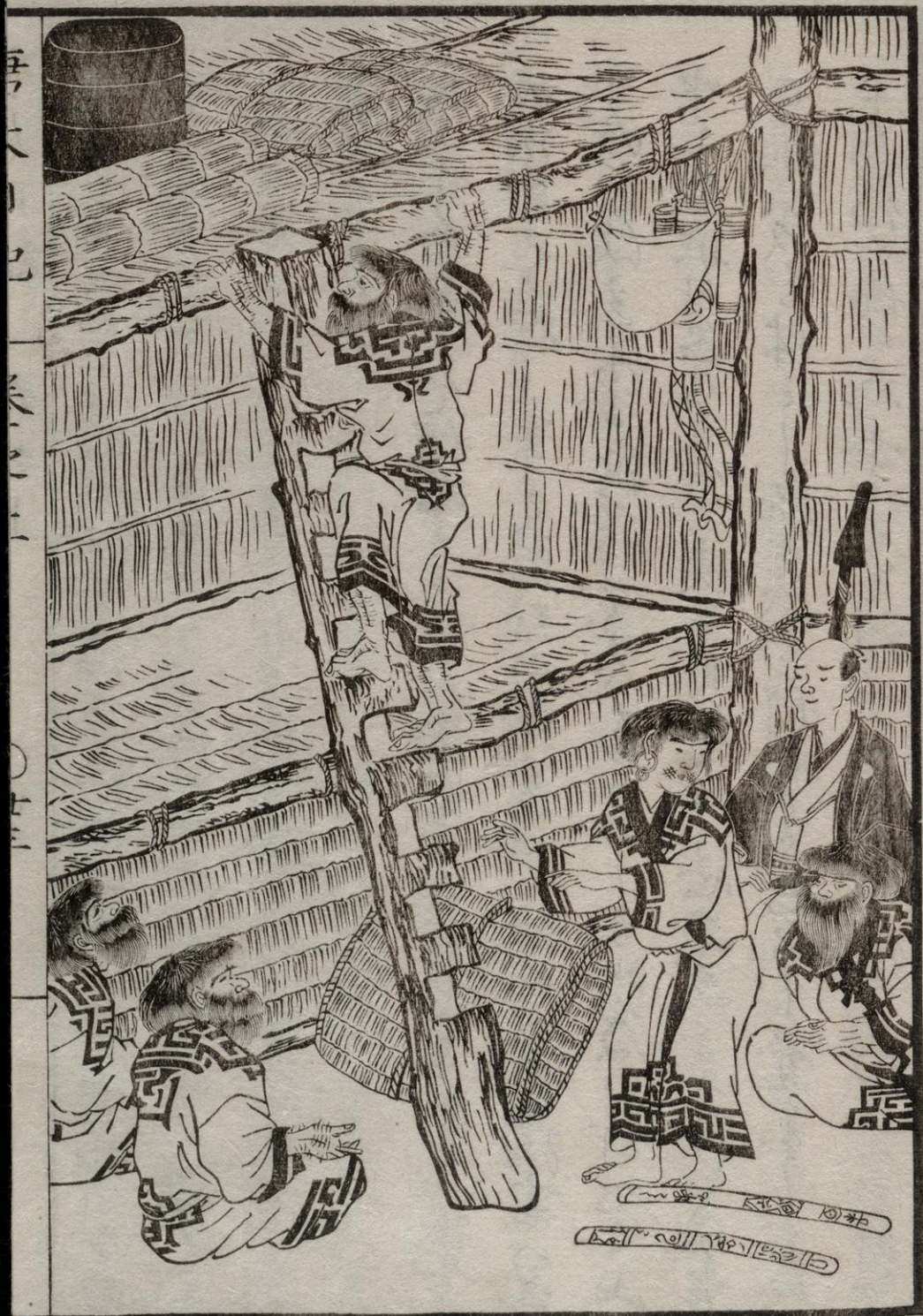
今大内言
春
三十一

夫より拾丁余よりフルシチヤン^{地名} 澳小屋式軒あり又拾四五丁
初てトノシチヤン^{地名} 此辺は夷家七軒ありて七歳斗と四歳斗の
小児或人並居をり此夷家ハ我より村東邊百人是ホニキツ^{人名}夫妻
の家あり妻をシユコシイケ^{人名}といひ家ハ老人或人ありと云此
小児をホニキツ^{人名}子ありと云るホニキツ^{人名}此子と愛を養ひ
置クシユコタン^{地名} へ夫婦を移して居るこの此後の人まは
常々れらあり今日ハ已う家ハ空なるよりはく止宿して
来ると遅くあり此処よりまはく同い道と初と元二十丁余より
て郷導サアブニアイ^{人名}の家ハ着せりサアブニハ當時家内九
人等りのよりあるとも春届斗りともありは寄合世帯のより

小瓶ハ四割ハ二割半モツクハシ燻を二割切てあり其一段高き
 所ハキナ（たりの）と交て余ハ空を設けし余サアブニハ寶物と
 見せしと乞ふれを一本（ハシユ）様子にて極上より延かますの中ハ
 赤錆（サビ）の太刀の身と其鞘と出さし然るに生刀此錆くさる故
 もや鞘は入るゝ又生外ハ銀箔と貼くさる菖蒲刀の身相の板
 少く作りしを見せし余ピリカくと賞しけさハサアブニも其
 賞せしと心何思ひや羨しし次ハ中々カマスの内より女の古
 着と出さしコトせし是ハ彼ハ晴れ急の生（ナマカ）壁をよそ裾摸振
 の紋附奈少是を折疊せしふゆハ赤く唯かき次の内ハ押入
 たまは揉む雛とてと諦るし今宵ハ山中と違ひ安心しと

うき野

注此処平地にて東の方のタユイノホリより落る河と南ニヨ
 ロマイの方へ落る川と合して是より五里斗を下リナイ
 ブツ川より落合よりあつ人家九軒ありてサアブニ此所
 の小使役やうの故に家も相應は多くて余も此處にて
 止宿せしあつこは耐寢を乞はるはやそつ一本撈りて
 櫛のよへ棄り延かまるとと地りこは中より古着を授け
 太き刀の身を本と鞘とを出しは母をとりけりこは身
 志て子母榎子巴の紋とこは程彫きり其鞘ハ出人より
 の細よりあるや撈りて処と巻至極雅味ありと



表教とてきこのなり扱其債の柱とてんてく文字扱のこの
有り教よ是を問うて又口ニシハのカンヒと答へて見ると
如何とも手垢して黒くあり終に讀むことを均さうしも
遺恨ありける

按るゝ余是をて何処もせよ落書すゝふぬとのりて生来よ
所附あると徒々事と忘むの情高く依て余は落書つ云
「及も及まふよ所附するはありし此度の行処と山
中して紙目等と見て夫を目的とて心未了とありし者
已外ハ我も休こし所ハ必し何成とも志すゝ置るまゝとれ
と心付ち依てらうと人を傳ふも其又生任よ尚れハ顔面を

あはくし一箇とさる処へ引ひきたる何れ英雄其傑後やとて
も鷲馬はおとろくし一落書紙目も堂社の物産まきの白蟹杯
いと有用あるものこそとさる備をしかゝる山中くと感ふる村ら
一匹の直もあふ金とそて定むる家

廿四日晴よりサーブニの宅を出て前の川を渉りて中と
深草の内へ分入さるう款冬との余のまの是までよりと生茂り
て悪きらんかゝるあートウニトウ地の服と通り山よとさる野

地とさるて小川よあさるウロウと云所あり爰して鳥雀の鳥

と遊ばせると捕へく深草の内へ移ちやうとる夫より叶の

中を歩めてミアンチヤ地と云も此所夷家二軒エフ人と

云々の家よ休む此家より直養と休む... 此小家の前
 へ搬夷船を備へたり依て是より乗る川中或拾間余も有
 趣し是夕コエの川下あり兩岸垂柳して屈曲し拾丁余
 してオシ子ナイ地名と云川は落合是より幅廣くありあり
 注此処余より通りしより少く異り余ら夕コイより山道を
 里半計りありしへシ子カルウ地名と云るの処より此里余も
 下り此リアンチヤのエフレハの家より休む夫より廿丁余も
 ちくナエブツへ下るあり此ナイフツ川ハ西北より落合して
 此川の本川も是より上より人家或は村もあるし一凡
 是より河巾七八拾間より及び此原より四尋より六尋

位も及ぶ當島トツリ以南の第一の巨川にて水豹も
多し

キ、ニウシ地名アフコタン地名ビラホ地名ありと過て三里程にてホロスウ

川岸よりよく眺む此所より女妻を人佇居て声を掛るる極

美船式艘来りて余る舟中のサーブニ人名と物語りてやびそ

乗来り船と交りて乗替せり此辺より雨頻り降出し

寒し堪ふ其形状と窓ありや女妻薪の燧さしを持

来り火鉢持の物あれなき足程も有る板より首さく

手と暖めせり程長く薪火をたきとも板より火燃へる暖あり

此辺左右の水より水豹討く首と出り船と窓をすまへり川

唐太... 言... 卷之... 七十五

岸の鬼の居るをりサーブニは関は是をヲリケエ鬼の

のり夫よりまのりとき里余してナエブツの岸より青竹仲と夷言

行き夷家より著して通辞の豊吉と跡船して後までり無く

糧米のゆ心よかよ六余柳が望へる夷語をり運上屋

チツアマ、アンナと問へる夷人等首をふりてイニヤムくと船

のふ爰して大の望と先ひ如何ハせんと案へ燃ひきり雨ハ無

まのり強く寒さん堪へるは燄は焚火とてり身を暖め

濡るる衣敷と乾くをり問へ臨船も著て夷語も通し

直養も書るる書状と取出るる漸く事情もあつたり先々

直養も心構へる賜りて武苞の末ハ是迄の間宮も持たり

余等との為よしニユンコタンよりおくろくき米の束と着せし先立の
為よし疏より野呂米船ハ昨日此地を過てオタサン^{地名}と云所より
行過るよりあるは此船と引留て糧食の手当はるはへし
として直養をオタサン^{地名}と云所よりて走り行はるはよりなりか
故は我等も同行の糧食ハ如何と云米と十方は暮るなり

評先生十方は暮るれはむ目眩は見るものぬ

今白米ハ漸くハ殊あり云米も亦幾あるよりあるは豊吉や完
志く是より武里斗りも南あるニユンコウシナイと云所より云米
と平入加満と取寄なり是めて皆く力を得て此夜より云米
と食と云とて穢して齋したる焼酎と云物もサウハ喫して

東海
言
卷之
七

打師より其家の至入の名をワーチマアイノと云ふ

注此処ハ東海岸より一萬里の波濤目よ深きものあり此河ハ
壯地骨一の大流沃目數十里開くも源ルルウタカノホリより
来ル其川口の南畔に家居とナイブツと沢の入口とのふ儀
の熱而氷心塩氣と會ると惡し武捨所も上の壯岸一ツ
の沼あり元四り武里もあり其辺り皆根木之系海岸よ
五鬚松の長き木より武上位の木の林とありたう秋より来
此辺り鶴居に林さへゆくの水多きなりこは所の音の喋り
きさか家の内よりして對面し物格しとるも聲を好むと
て岡より難きほどありと云

甲寅
唐太日記卷の上

唐太日記
卷の上
の十二

有難難

九然然

臣臣臣

言言言

卷卷卷

之之之

上上上

七七七

